

ハレー彗星って何だったんだ？

加藤 一 孝*

あのハレー彗星大騒動もようやく終り当分続いた中途半端な夜明け型の生活も徐々に昼型生活へともどりつつあります。

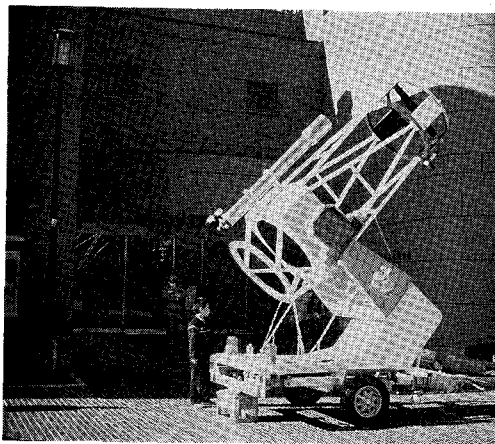
思えば、あの異状なハレー彗星騒動はいったい何だったんでしょうか。日頃少しは感じていたものの、一般大衆に対するマスコミの影響力のすごさには本当にびっくりしました。我々と同じ様な施設にお勤めの方々は似た様な経験をされたものと思います。我々の広島という街は、人口 90 万の中位の都市です。広島市こども科学館は開館して 7 年目を迎え、市民にようやく存在を認められつつあります。このような所に勤める私達が受け、感じたハレーフィーバーを語る事で、一般市民がハレー彗星に対して何を考え、どんな行動をとったかを知ってもらいたいのではないかと思います。

さて、私達のところではその騒動のピークは昨年の 11 月と 12 月、そして今年の 3 月 4 月にありました。最初は 11 月 26・27 日、ハレー彗星の第 1 回地球接近の日です。それまでパラパラとかかっていた問合せの電話がこの日は 5~6 倍になりました。前日マスコミで報道されたのです。それからしばらく落ちつきません、たぶん「ハレー彗星は来年だ」との意識が皆さんにはあったのではないのでしょうか。

そして次は 12 月 7 日チロ望遠鏡の西日本巡回初日です。集まってくる人数の予想は全く出来ませんでした。当日は、地元の天文協会・大天連の人達の協力を得て望

遠鏡を 50 台揃えて広場で待ちました。最初は曇っていましたが開会式の始まる前に数百人の列ができ、観望会としては我々も経験のない 3000 人という人達が詰めかけ大成功でした。いかに多くの人達がハレーに会いたがっているかを知りました。

さて、1 月、2 月と静かだった時も過ぎ、3 月に入るとジャンジャン電話が鳴ります。3 月 16 日には光学品店が主催した観望会が多くの人達に知れ渡り、前日の 15 日には私達の受けた電話だけで 60 件近く、特に昼休み中に部屋の電話は鳴りっぱなしで一人で部屋にいた私は全く食事もとれませんでした。観望会は 1000 人以上の人達が会場の山に集まり麓は大混乱だったそうで、そこ

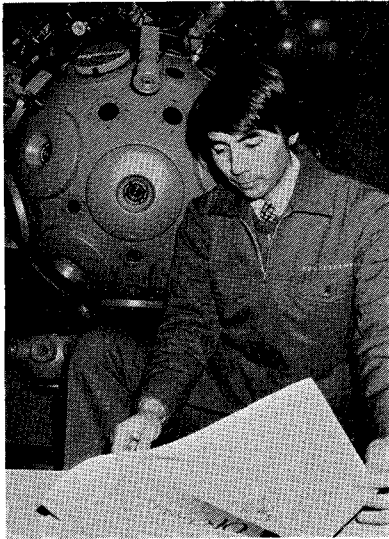


▲ 館に着いたチロ望遠鏡
ここで展示後観望会場へと向った。



◀ こども文化科学館とハノーバー庭園。

* 広島市こども文化科学館プラネタリウム: Kazutaka Kato



筆者とプラネタリウム (中国新聞社提供)

に集まった多くの人達がハレーを確認できないで引き上げたそうです。その中にいた子供会の人から翌日、半分脅迫めいた電話で、責任を取って別の日にイヤイヤ観望会をもたされました。好意で計画した観望会がとんでもない結果となりました。

そして次は「ハレー見物は春分の日前後が良い」という報道の影響で3月20日には「明日しか見えないと聞いたのですか?」といった電話が多くなりました。次は4月11日地球接近の日、最後は月食のあった4月24日でした。

さて、昨年暮から始まり3月の声とともに去ったハレ

雑報

Be星と非動径振動

早期型特異星の代表的なものにBe星と呼ばれる星のグループがある。(Ap星と東西の大関を張ると思う。どちらが東の正位かは別として) その名のとおり中性水素や1回電離の鉄などに輝線がみられるのだが、その輝線輪郭の特徴や自転速度の大きさなどの観測から、次のようなイメージがもたれている。すなわち、かなり高速で自転する中心星のまわりに、その自転の影響でか、赤道方向に、ちょうどドーナツが赤道面に置かれたような形で、ガスの集中が見られるというものである。ところがこのドーナツの作り方がわからない。これまで自転による遠心力とか早期型星によく見られる輻射圧による星風などが、中心星の表面にある材料から料理する方法として提案されてきたりしたが(連星系では相手の星からの質量の流れ出しが考えられるが)どれも十分な説明を与えきかなかった。

一彗星ブーム、この中で共通した質問の内容は「どの方向を見れば良いか?」「何時見ればよいか」に加えて一番多かったのが「どこで見れば必ず見えるか?」であった。近くにチョットしたポイントは少しはありましたが決して場所は答えなかった。その事で不満をもたれトラブルも多かった。しかし、我々が1ヶ所でも教えると人々がそこに殺到し時間が時間だけに、付近に住んでいる人達がこうむる迷惑は多大なものがあると判断した為であった。まして、そこに行っても必ず見つけられるわけではないからだ。さらにこまったのは「どこで見れば見えるか」と共に「どの位置に見えるか」である。これは、星空のどこか?ではなく「我が家から見ると〇〇ビルがある。そのどちら側の位置か?」である。日周運動で位置の移る説明をしなければならぬのはもちろん、我々は県内はもとより、近隣のどの地域の地理にも精通していなければならないのであろうか。

思うに電話で質問された方の90%以上は見る事が出来たのかは疑わしい。それはプラネタリウムに入館された人達に質問した結果でもわかる。しかし、来館され我々に応じた人の90%以上が見ておられる。何事にも本人の努力が必要だと思う。

さて、終ってみれば何でもなかった? ハレー彗星。ハレーを見て夢を無くした人、夢を持った人、見えなくて夢をもった人など色々です。静かになった今日、あの騒ぎをかきたてたハレー彗星とは、いったい何だったんだらうかと思う。ハレー彗星の番組を作る事で、我々もマスコミと同じ様にブームをあおったのだろうか? 確かに、入館者は増加したのだが。

ところが1982年 Baade, D. (Astron. Astrophys., **105**, 65) が 28 CMa で、1983年 Vogt, S. S. and Penrod, G. D. (Astrophys. J., **275**, 661) が ζ Oph で、そして1984年 Baade, D. (Astron. Astrophys., **135**, 372) が μ Cen で1日程度の周期の線輪郭の変化を報告し、それが中心星の非動径振動現象を反映しているとしている。Be星の場合、自転速度が大きくこれも日程度で自転するので中心星表面にある spot のようなものを見ているとする考えも可能だが、非動径振動の方がありそうだと考えられている。これらの観測では固体素子を用いた高S/Nスペクトルが利用されており、技術の進歩がこれまで見えなかったものを見えるようにしたという点でも興味深い結果である。ちなみにこの非動径振動はBe星に限らず早期型星でも珍しい現象ではないようである。例えば、Publ. Astron. Soc. Pacific, **98** (1986) に “The Connection Between Nonradial Pulsations and Stellar Winds in Massive Stars” と名づけられた Workshop での Invited paper が紹介されている。(門 正博)